君とつばさ

平成27年10月10日
発行・公益財団法人 交通遺児育英会
〒102-0093　東京都千代田区平河町2-6-1
（電話）03（3556）0771
（HP）http://www.kotsuiji.com

©交通遺児育英会

つどい参加 最多更新

88家族200人 交流の輪が拡大

「高校奨学生と保護者のつどい」が8月22、23の両日、都内のホテルで行われた。毎年参加の形にして2年目で、今年は昨年より8家族増、参加人員23人増の88家族200人が参加し、最多更新した。高校奨学生を対象にしたグループワークゲームには、同伴した家族の小学生や中学生も積極的に参加し、交流の輪が拡大した。

（関連記事2面）

小・中学生も一緒にゲームに参加

高校奨学生は、昨年に続き10班に分かれて、グループワークゲームを楽しんだ。

最初に「じゃんけん回り」などのゲームで、初対面の緊張を取り除き、続く「自己紹介ゲーム」で、出身県、趣味、好物、特技を互いに披露。

仲間と自然に話せる積極的な面が出てきたところで、対抗戦ゲームに入った。

対抗戦ゲームでは、互いに戦略を練り、チームワークが形成される。強いチームは、リーダー役や皆をフォローするサブリーダー役がいつのまにかできていた。

また、遠慮し合い、なかなか連携がとれないチームも、対抗戦を重ねるうちに、次第にかけ声が活発に交わされるようになり、連携がとれていった。

同伴した小・中学生も積極的に参加。皆が名残惜しそうな中、約2時間半のグループワークを終えた。

一方、保護者は別会場で11グループに分かれて、懇談会を約2時間半行った。保護者から、奨学金給付や返還制度のあり方、自宅外通学生の家賃補助制度や学生寮の拡充、語学研修への質問が集中し、職員が現状を説明。続いて、保護者が共有する、子どもの進学や就職問題に話題を移し、互いに情報を交換してアドバイスし合っていた。

このほか、子育てや家族の問題にも話が及び、懇談を終えた保護者の多くは、「皆さんと話して力をもらい、またがんばろうと思える」との感想を述べていた。

夕食を兼ねた懇親会では、高奨生、保護者ともそれぞれが同じグループでテーブルを囲み、会話がはずんだ。

「来年というより毎年つどいに参加したい。OBも参加できないだろうか」という参加者の声もあり、盛会のうちにつどい1日目を終了した。

グループワークで人気があったゲーム「じゃんけん回り」

保護者が11グループに分かれて、懇談会を開いた

相談会に11家族が参加

今年も「つどい」の中で、希望する保護者と個別に相談会が行われ、育英会職員が11家族の相談に応じた。「かつて優等生だった子が不登校に。どう立ち直らせたらよいか」「子ども2人が大学進学で、この先、返還できるか心配」「どちらの実家とも折り合いが悪くて、援助は期待できない」など、進学と子育て、経済的な不安に関する相談が多かった。

とりわけ、経済的な不安に対しては、育英会職員が、対処法の一つとして、育英会に、奨学金の進学準備金や入学一時金、奨学金返還の猶予制度、学生寮や自宅外通学生の家賃補助制度などがあることを詳しく説明した。

また、奨学金の返還は奨学生自身が社会人になってから本人が返還することが原則なので、「事前に話し合っておくように」との助言も行った。

奨学生募集中

語学研修生27人 米豪加から帰国

アメリカ、オーストラリア、カナダでの海外語学研修に参加した高校生27人が、8月上旬から下旬にかけて無事帰国した。

米国研修には、英検3級取得や面接などを経て選ばれた24人が参加。3年目となるカリフォルニア州ミッション・ビエホで、約3週間現地家庭にホームステイして英語を学んだ。

現地でのカリキュラムは、午前中は英語の授業。研修生6人に1人、現地学生が一緒に行動した。

帰国後のリポートによると、多くの研修生がジェスチャー交じりの英語で、積極的にコミュニケーションをとった。午後はアクティビティーの時間だ。ビーチや遊園地、ウォーキングツアーにメジャーリーグ観戦、映画などを楽しんだ。休日は、ホストファミリーとショッピングやゲームをしたり、ホームパーティーを開いて親睦を深めた。

また、AFS委託によるオーストラリア研修には1人、カナダ研修には2人が参加。オーストラリアは昨年に引き続きタスマニアで、カナダは英語圏3州でともに1か月間の研修。カナダでは、ドイツ、イタリア、コスタリカ、香港の学生も参加し、国際交流の輪を広げた。（関連記事3面）

エンゼル・スタジアム・オブ・アナハイムで

「アンドロメダの涙」

アクリル画　パネル

東京造形大学　2年　寺内　遥奈

こころ

長くサラリーマンをしていると、「伏してご海容のほどを…」などと、日ごろ口にしない言い回しを使わざるを得ない場面が、2度や3度はある▼《芥川賞は、私に下さいまするやう、伏して懇願申しあげます》――選考委員の佐藤春夫に宛てた、長さ4㍍に及ぶ太宰治の毛筆書簡が見つかった（9月8日付読売新聞）。同じく「伏して」も、平身低頭、賞をねだる様には、軽薄な謝罪と違って、切実さや悲壮感を超えて、滑稽味すら漂う▼芥川龍之介に憧れた太宰。その太宰の『人間失格』を、100回読んだという又吉直樹さんが、芥川賞を受賞した。『火花』の書評は、2面の「もう読んだ?」に譲るが、作品が候補に選ばれたとき、又吉さんは、太宰の墓にお参りしたそうだ▼懇請むなしく、ついに受賞の栄誉にたどり着けなかった師に、何と報告しただろうか。泉下の太宰は、自分を慕うそんな新人作家に、どんな祝辞を返しただろうか。《又吉さんには芥川賞がよく似合う》か。「そんな戯言を書いてはならん」と言下にいさめられそうだ▼伏してご海容のほどを…。

本紙は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

家族3人で支えあって

講演会　母、学生が体験談

鈴木花奈子さん

メモをとりながら、講演に聴き入る参加者

佐藤文子さん

「高校奨学生と保護者のつどい」講演会で、心塾関西寮生の京都光華女子大学3年の鈴木花奈子さん（22）、保護者の佐藤文子さん（52）が、それぞれ父や夫を亡くした体験を語った。

2歳の七夕の日に消防士の父を亡くした鈴木さんは、冒頭で「織姫と彦星が年に一度だけ会える日に、父と母は離れ離れになってしまい、毎年七夕を迎えると複雑な思い」と、残された子どもの心情を吐露。事故の経緯に話が及ぶと、会場に涙をぬぐう姿が目についた。名古屋市の実家に帰省すると必ず墓参りする鈴木さんは、最近自動車免許を取り、「初めて自分の運転で墓参りした」という。そして、残された家族がたどった「山あり谷ありの20年」を振り返った。「母が父の職場の人たちの支援を受け、消防局で働き始めた」「反抗期で母を悩ませた兄が父の後を継いで消防士になった」、鈴木さんが「反抗期に不登校や高校留年を経験した」――などに触れ、最後に「これからも3人で支えあって、一度きりの人生を悔いなく生きたい」と結んだ。

続いて、佐藤さんが登壇。冒頭でこのつどいの講演の日が夫の命日であることを告げ、3人の子どもたちにまつわるエピソードを中心に講演した。トレーラー運転手だった夫は14年前に亡くなった。その時、長男は13歳、長女9歳、次男4歳。ぼうぜん自失の佐藤さんに、「長女が木製のフクロウ3羽と壁掛けをプレゼントしてくれた」という。壁掛けにはえびす様の顔が描かれ、「人生楽しく過ごすコツ」という訓示が書かれていた。

「父を亡くして2週間なのに、自分の悲しみより私のことを心配してくれて。フクロウ3羽には、子ども3人で母を見守っているという意味がこめられていた」

佐藤さんは「泣いてなんかいられない」と反省し、働きに出た。

最後に一家の近況を報告。いま、教師をしている長男（26）は今年3月に結婚し、長女（23）は動物病院に勤務、次男（18）は昨年育英会の米国語学研修に参加したそうだ。保護者たちは自らを重ねて共感していた。

高校奨学生と保護者のつどい

参加者の声――アンケートから

「グループワークがよかった」高校生

保護者「癒やし、安心、心の解放」

保護者も高校生も懇親会を楽しんだ

つどいに関するアンケート（回答率94％、複数回答）では、高校生83％、保護者95％が「参加してよかった」と回答し、保護者の満足度がより高かった。

よかった理由として、高校生は「いろいろな意見を聞いて、よい影響を受けた」、保護者は「同じ経験をした人たちとの交流による、癒やし、安心、心の解放」を一番に挙げた。

グループワークについては、高校生の81％が「よかった」と答え、「初めて会った人と自然に話すきっかけとなった」ことを一番の理由に挙げている。

保護者の懇談会も大方好評だったが、留意点として「懇談会の時間が短すぎる」「グループメンバーと接する時間がもう少しほしい」との意見をあげる人も23％いた。

このほか、「他の人の話を聞いて自分もがんばれる」「つどいに繰り返し参加することで、より親密になれる」などの回答が、高校生、保護者ともに多く、講演についてはほとんどの参加者が、「よかった」という感想を述べていた。また、「来年も参加したい」と参加資格者の大半が答えていた。

世帯収入　100万円急減

遺児家庭調査〈補償金〉

「交通遺児家庭生活実態調査」によると、事故の被害者は、奨学生からみて父親が86％、母親が13％。全体の約8割（82％）が死亡事故だった。

後遺障害をもたらした事故は17％で、そのうち身体障害が8割、精神障害が1割だった。

事故後、被害者自身の生命保険や損害保険から補償金を受けた家庭は65％、相手側から補償金を受けた家庭が28％。この中には、加害者か被害者かなど、事故の状況によって、両者から補償金を受けた家庭もある。

このうち死亡事故に限ると、自身の生保や損保から受給した平均額は約2500万円で、相手からの補償金の平均は約3600万円だった。

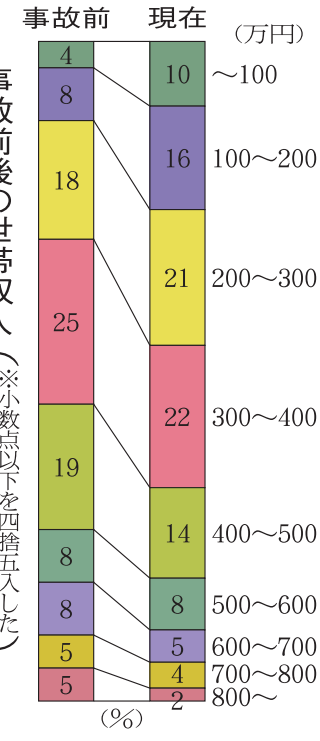
保険と補償金の両方が支払われた家庭では、受取金の平均は約3400万円。最高1億円以上を受けた家庭もあるが、全体の6割は3000万円以下にとどまっている。

一方、世帯収入は、事故の前まで平均448万円だったものが、事故後は352万円と、100万円近くの収入減になっている。

とくに、世帯収入300万円以下の家庭が増える傾向が著しく、事故前は全体の約3分の1（30％）だったのが、事故後は半数近く（46％）まで跳ね上がっている。

事故の前まで「給与収入」に頼っていた家庭が4分の3（74％）だったことから、事故によって働き手を失い、家計が一気に収縮したことがうかがえる。

調査は昨年暮れ、全奨学生の保護者1085人を対象に行われ、492人が回答を寄せた（回答率45％）。



事故前後の世帯収入（※小数点以下を四捨五入したため、計100％にならない）

10家族26人が心塾見学

―つどいでのビデオ上映も好評―

つどい2日目には、希望者10家族26人が東京・日野市の心塾東京寮を見学した＝写真＝。

見学者は最初に共同施設の食堂や大ホール、図書室、浴室、洗濯室に案内された。続いて1人部屋の居室を男子、女子に分かれ、保護者と一緒に見学。

施設利用の規則や寮生活の心得、講座や年間行事、また、最寄りの大学や専門学校への通学について、寮生の実例をもとに詳しく説明を受けた。

なお、1日目にも心塾をビデオで紹介して好評だった。

塩田評議員が死去

交通遺児育英会の塩田透評議員が、7月23日、亡くなった。61歳。

塩田評議員は、群馬、岡山両県警本部長などを歴任して警察庁を辞職した後、2009年に全日本交通安全協会入り。同専務理事として14年に育英会評議員に初就任、15年7月、再任された。

自動車新聞が紹介

日刊自動車新聞は、今年もつどいのようすを、8月31日付紙面で詳しく伝えた。

清新　正統　美しい青春小説

（文芸春秋　1,296円）

火　花

又吉　直樹　著

お笑い芸人による初の芥川賞受賞作。ご存じの通り大ベストセラーとなっています。「話題先行の本はあまり……」という方もいるでしょうが、一読して感じるはずです。近頃、これほど正統で美しい青春小説を読んだ覚えがない――と。

「東京には、全員他人の夜がある」。売れない漫才師の主人公・徳永が、舞台でウケ損なった夜につぶやく独白です。都会の疎外感が清新に描かれています。

物語は、徳永が花火会場で出会った天才肌の芸人・神谷と過ごす濃密な時間を軸に展開します。「人と違うことをせなあかん」と言う神谷と徳永との間で交わされる緊張感あふれる言葉の応酬が胸に迫ります。

新聞の〈社説〉が芥川賞作品を直接取り上げることはマレですが、本作は読売、朝日の両紙も、「文学の世界に新たな風が吹いた」などと称賛しています。作品の評価と期待の表れです。

作者自身は、「お笑いと文学とは近い」と新聞のインタビューで答えています。

そのお笑い界からは、イキのいい小説の発表が続いています。

爆笑問題・太田光の『マボロシの鳥』、劇団ひとりの『陰日向に咲く』、インパルス板倉俊之の『トリガー』。落語界では、立川談四楼が『シャレのち曇り』を書き、講談界では、神田茜が『女子芸人』で新潮エンターテインメント大賞を受賞しています。

読書の秋の始まり。より身近に感じる舞台で活躍する〈作者たち〉による作品から、小説世界にアプローチするのも一興でしょう。

渡辺　覚　心塾関西寮読書感想文講師

もう読んだ？

異文化に体当たり

米豪加 語学研修生リポート

海外語学研修に派遣された高奨生27人は、今夏もアメリカ、カナダ、オーストラリアで、英語学習や施設見学、観光を通して、異文化との触れ合いに体当たりした。研修生リポートの一部を紹介する。（敬称略、写真は米国研修から）

▲学習

▼ビーチ

勇気を奮い起こし
中内 竜馬

初めは、聞き取りができないのを言い訳に会話に積極的ではありませんでしたが、"Don't be shy!"（臆病になるな）という言葉に出会いました。積極的になる必要を感じていたとき、僕の背中を押してくれる強い言葉でした。その言葉に勇気づけられて、ホストファミリーと互いの国について話してみたり、好きな音楽を語り合ったりしました。互いのことがわかってくるにつれ、雰囲気もよくなりました。この経験から、「積極的になる」ことが大切だと知りました。（大阪府）

"両親"と生活一緒
岡本 真都香

午前中の授業で、初めは会話がとても速く、聞き取れず難しかったけれど、ゲームや歌で学ぶ授業がとても楽しかったです。これまでの学生生活で、勉強が楽しかったという記憶はありません。

私には両親がいませんが、お父さんお母さんと呼べる人ができて、一緒に生活した3週間は、一生の宝物になりました。（熊本県）

母2人の幸せ者に
三上 鈴菜

帰国するとき、ホストファーザーとホストマザーに「また来年の夏も来ていいよ」と言われ、本当にうれしくて涙がでました。帰国したいまも連絡を取っていますが、本当のお母さんのようで、母が2人もいる私は幸せ者です。（茨城県）

「出る杭」になる
沖野 太郎

研修で、「出る杭は育つ」ということを、身をもって学びました。何もしない人より、積極的な人の方が伸びるという意味で、アメリカにぴったりだと思いました。日本でもアメリカでも、私は「出る杭」になりたいと思いました。（広島県）

自信と誇りの文化
砂田 悠里

人と人の関わり方にとても感動しました。日本人は、人と目が合ったらすぐ目をそらします。現地の人々は、人と目が合ったらニコッとほほ笑みます。よいときは、そこから会話が始まります。私は、その文化が大好きです。カリフォルニアで出会った人たちは、自我がはっきりしていて、自信と誇りを持っていました。私もそうなりたいと思いました。（東京都）

▲さよならパーティー

思い出のホスト家族▶

サプライズ誕生日
嶺山 和希

研修中に私の誕生日があり、夜、ホストファミリーの親戚まで勢ぞろいして、サプライズパーティー。ホストマザーは、「あなたの16歳の誕生日は今日しかないから、特別な日にしたかったの」と言ってくれました。

習っている空手を披露したことで、言葉以外に自分の力で文化を伝える方法も見つけられたし、実際に生活して、授業では習うことのない生きた英語も学びました。英語をいちいち日本語に変換して勉強することが大切なのではない、ということに気づきました。

たった3週間でこんなに多くの経験ができ、私は確実に大きく成長できました。（兵庫県）

私たちの国際語
松井 百花

研修には、日本、ドイツ、イタリア、コスタリカ、香港の生徒が参加していました。互いの言葉を知りません。しかし、英語という国際語のおかげで、会話も友だちになることもできました。英語はアメリカ人の言葉ではなく、まさに私たちの言葉でした。それぞれの国独特の、訛りのある英語を理解する大切さに気づきました。（大阪府、カナダで研修）

ダウン症者支援を仕切る笑顔

障害者施設の一室で子どもたちが大はしゃぎ。ボランティアの学生も一緒になってじゃれるうち、工作が始まった。子どもたちは、ダウン症者。その健常者のきょうだいや保護者も混じる。

熊本市郊外の九州ルーテル大学人文学部3年江上聡さん（20）は、学内サークル、ダウン症支援部の総リーダーとして、約80人の仲間を1年間まとめてきた。毎土曜、県の施設に出向き、幼児から40歳代のダウン症者約50人の療育活動に取り組む。

9月半ば、熊本市の秋の祭り「みずあかり」で使う竹灯籠を作った。年齢に応じてダウン症者が5組に分かれ、学生は製作を手伝う。江上さんも、5組を精力的に回って仲間をてきぱき仕切りながら、一緒に絵描きに興じる。

「みずあかり」祭りで使う竹灯籠の絵を幼児や仲間と描く

江上（えがみ） 聡（さとし） さん
九州ルーテル大学 人文学部 3年

「クレヨンしんちゃんの絵がいいかな、ドラえもんもうまいんだよ」

人懐こい笑顔が絶えない。中・高と野球部に入り、大学でも軟式野球部で投手とサードを守る。

「野球ばかりで、ボランティア活動をしたことがなかったので。障害者は何もできないんじゃないか、という偏見もあったが、触れ合ってみると、健常者と全く変わらないし、障害者としての個性もあって、見方が変わった」

日々、「勉強5、サークル3、野球2程度」の割合で、気持ちを傾けている。

就学期を挟んで、事故で重い意識障害になった父祐一さん（享年40）を亡くす。母千香子さん（42）が心の病に陥る。小6のとき、母と弟薫さん（18）が、母の実家のある福岡県に引っ越す。以来、祖父大丈夫（まらお）さん（80）と祖母サダ子さん（76）宅に世話になる形で熊本県に残った。

「朝食と弁当を祖父に作ってもらっている。アルバイトをして、祖父母に少しはお金を渡しています」

はばたく

担当の組に応じてシャツを色分け。あずき色が総リーダー▶

建築士や保育士、小学校教諭に憧れたこともあったが、母の病を機に心の働きにも関心が生まれ、心理臨床学科に進んだ。が、「家庭の事情」で、教職やカウンセラーの道は断念した。

「教職や精神保健福祉士の資格を取るには、お金がかかる実習が必要なので、いまは（費用の）しばりがない、企業への就職を考えています」

来春からの就活では、営業職を目指す。「人とのコミュニケーションが得意だから。県内で働くと決めています。母は弟に任せて、自分は祖父母を養う。弟と、そう話し合っている」

今夜と明夜、市内各所で竹灯籠に火がともされる。灯籠に照らされる笑顔が、輝きを増す。

衝撃 バイオリンが蘇った

夢まっしぐら

柳原（やなぎはら） 怜美（れいみ） さん（25）

中部楽器技術専門学校 弦楽器製作科２年（名古屋市）

木工道具を操って板から成型、塗装して製作、繊細な音を生み出す職人技を学ぶ

―楽器の専門学校で、どんなことを学んでいますか？

「私は、バイオリン修理＆製作コース。工房のようなこの教室で、バイオリンを作ったり修理したりする技術を勉強しています」

―なぜバイオリンを？

「小1のとき、『題名のない音楽会』というテレビ番組を見て、『これがやりたい』と親に訴えたそうです。母が地元（埼玉県）の市民オーケストラを探してくれて、楽団に入って習いました。

小3のとき、傷だらけのバイオリンを定期調整に出したら、戻ってきたとき、どこに傷があったかわからないくらい、つるつるに蘇（よみがえ）っていました。感触は確かに自分の楽器なのにと衝撃を受けて、『そんなことができるんだ。私もこれをやろう、いいじゃん、これ』と、演奏より、いじる方に興味がわいてしまった」

―ずっと演奏を続けた？

「中学には吹奏楽部しかなくて、バスケットボール部に入りました。練習で左手の小指を骨折してバイオリンを弾けなくなり、楽団も演奏もやめました」

―高校を卒業して、進学ではなく就職しましたね。

「高校のとき、この学校を含めて専門学校で学ぼうと調べました。でも、学費が出せなかった。食品会社やアパレル会社に勤めましたが、ずっと楽器を学びたいと思い続けていました。5年働いて学費として300万円ためて進学しました。いまは、アルバイトをして自活しています」

―実際にバイオリンを製作するんですか？

「卒業までに2台製作します。木の板を削って成型し、塗装もして、すべて手作りです。楽しいですよ。修理するにも、自分も弾けないといけないので、演奏のレッスンも受けます。10年以上ブランクがあるのと、小学生とはレベルが違うので、難しいです」

―来年卒業ですが、改めて就職ですね。

「実家に近い楽器店に勤めようと就活中です。職場に近い所で一人暮らししたいと考えていますが、両親は自宅通勤してほしいようです」

高次脳機能障害で闘病中の父淳志さん（45）と母美佐子さん（45）、妹2人が実家で暮らす。働きだして家にお金を入れていたころ、一家の長女として家族の将来も考えていたが、いまは勉強に集中。夏休み、帰省して久しぶりに母手作りの冷や汁を口にした。「実家に帰った」としみじみ思う。

休日は、華やかな〝森ガール〟に変身、ショッピングモールに出かけるのが楽しみ。「それが〝素〟の私。学校とバイト先は、作業着です」

オンステージ

地元密着イベント発信

渋谷（しぶや） 征代加（ゆたか） さん

イベント制作運営会社経営

北九州市・小倉駅近くの西日本総合展示場で「巨大いきもの大冒険!!」展が8月いっぱい開催された。今年が3年目で、観客動員は5万人弱。「昨年は12万人だったんですが、残念ながら今年はこの数字。『巨大いきもの』のアトラクションが目玉でしたが、来年は鉄道をテーマにしたイベントを思案中です」

企画運営者渋谷征代加さん（51）は、早くも来年に照準を当てる。会社は6年前に立ち上げた。アトラクションの企画制作からイベントの運営、楽曲提供、アーティストのプロデュースまで総合的に行っている。今回のイベントテーマ曲も渋谷さん自らが作曲して、プロデュースした。企画は2月にスタートし、開演まで実質5か月のスケジュール。アトラクションはスタッフ10人で制作し、会場は40人で運営する。

「すべて手作りだから大変です。九州でこれだけマルチに活動する集団は、ほかにないのでは」

福岡県筑紫野市を営業拠点にし、アトラクションの制作は佐賀県のファクトリーで行う

渋谷さんがイベント業界に関わるようになったのは、長崎県の佐世保工業高等専門学校機械工学科を3年で中退し、東京工学院専門学校音響芸術科に進んだのが会社で、専門学校を卒業するとそのまま就職。

「家を出て、自分がまず幸せになることが、親孝行になると思っていました」

会場に育英会の募金箱を設置

渋谷さんは休みなしで、考える暇もないくらい忙しく働き、気がつくと責任あるポジションを任されていた。ところが、渋谷さんに故郷から地元佐賀市で小料理屋を開いていた母民子さん（75）の具合が悪い、と便りが届きっかけだ。周囲の反対を押し切って上京したので、自活を強いられた。アルバイト先はイベント制作運営く。父政孝さんは、渋谷さんが生後間もなく、交通事故で亡くなった（享年25）。2人きりの家族なので、渋谷さんはUターン転職を決意。地元で1人、会社を立ち上げるが、うまくいかず、知り合いの誘いに乗り、イベント会社の立ち上げに参加。長崎県のオランダ村（現ハウステンボス）で音響の仕事をした。

「でも、東京とは予算が2桁違い、自分の思うようなイベントが組めず、落ち込みました。そんな時、前の会社の後輩が退社し、自分を頼ってやってきた。その後輩に説教されましてね」

渋谷さんはその会社を離れて、後輩と一緒に再び会社を立ち上げる。1990年、長崎旅博覧会でイメージソングをプロデュースする傍ら、2年ほど熊本県のグリーンランドでイベントの企画運営に関わった。

巨大いきものは「世界最大級45㍍の未確認生物の体内を大冒険」というコンセプトのアトラクション

仕事は順調だったが、そこで知り合った仲間と共同経営で、再度、地元佐賀にイベント会社を立ち上げた。渋谷さんが28歳の時で、渋谷さんは、そこに16年間在籍した。その間に、ハウステンボスやグリーンランドに隣接した円谷プロ直営のウルトラマンランドのイベント企画運営に携わった。

「いまは円谷プロの〝九州エリアリーダー〟になっていて、ウルトラマンショーを任されています。地元に密着して利益を還元するには、手作りをメインにした仕組み作りが大切。地産地消のオリジナルで元気にやれることを、全国に発信していきたいですね」

渋谷さんのイベントにかける夢は尽きない。

うわさをスクープに仕上げる取材

はつらつ

遠藤（えんどう） ありさ さん
北海道立登別青嶺（せいりょう）高校3年　新聞局（部）

職員室で、英検1級に合格した先生がいる、と世間話を小耳にはさむ。さっそく次号のネタにと取材、スクープ記事に仕立て上げた。

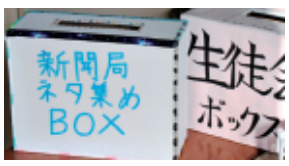
北海道立登別青嶺高校の新聞局（部）で、副局長を担ってきた3年生遠藤ありさん（17）は、日ごろから、友だちや先生からの「情報は、ちょっとでもネタになりそうだったらメモしておく」ことにしている。

〝記者歴〟は長い。小5、6の壁新聞作りの授業が面白かった。修学旅行や宿泊研修などのイベントのたびに、記事にイラストを添えて発表する。「文章を考えるのも、絵を描くのも好きだったから」

中学1、2年のときは、進んで学級新聞係になり、毎月のように新聞を作っては、クラス内に配った。

北海道には、七夕の夜、子どもたちが「ろうそく1本くださいな」と家を回り、菓子をもらって歩く行事がある。「それに関連づけて、『門限を守ってください』という記事を書いたり、夏だから怖い話を特集しようかと考えたり……」と、季節感も大切にネタを考える癖がついた。

▲得意な写真取材を任されることが多い



▶部活を締めくくる最後の紙面

小さいころ、父剛さん（享年44）が自動車レースが好きで、よく連れ出してくれた。そのとき、父のカメラで写真を撮ると、「うまく撮れている」と両親に褒められ、写真好きに。私生活でも外出時にはカメラを持ち歩き、写真を撮りためている。

女子ばかり13人の『青嶺新聞』では毎号、ペン（記事）とカメラ（写真）を担った。本物の新聞社に似て、編集会議では「部員同士の〝小競り合い〟が多い」と言う。

「意見をはっきり言う部員が多くて、私も自分が間違ってないと思うと、どんどん言っちゃう性格で。でも、本当のことを書くのが新聞じゃないですか。〝敵〟も結構いるけど、それでも構わない」

新聞局の硬派ぶりは、校内にも伝わる。職員室で、「新聞局は大丈夫か」と、先生にしばしば声をかけられたことも思い出になりつつある。前学期には、引退を控えた最後の紙面も作り終えた。

「仲間の話題になるネタを書けたときが楽しかった」

母 孝子さん（44）と2人で暮らす。母は、隔週に通院する難病治療の日々。「母とは友だちのような仲。いつもアイドルグループの話題で盛り上がっている」

犬を飼っていた。ペットショップに出入りして、「ペットトリマーになりたい」と意欲が芽生えた。ペンとカメラを置いて、この秋、札幌市近くの専門学校に願書を出す。「迷惑をかけている」と母を気遣いつつも、家を離れる。

パンチライン（結句）は、だから、「就職は地元か道内でと決めています。すぐに母の元に帰れるように」。

☆

お母さんの背中

薬の最適アドバイザーに

安田（やすだ） 厚子（あつこ） さん
ドラッグストア勤務（三重県）

三重県四日市市の近鉄富田駅からほど近くに大型ドラッグストアがある。そこに勤める安田厚子さん（47）は、医薬品の登録販売者の資格を持つ。薬剤師に次ぐ一般用医薬品が扱えるスペシャリストだ。

「5年前に資格を取りました。受験を決意してから試験まで3か月しかなくて、『絶対落ちるわ、笑わんといてな』と言ってたんですが、いざ模擬テストで悪い点を取ったら悔しくて。絶対に一発でと思い直し、必死で勉強しました」

安田さんは資格を取って仕事へのやりがいが増した。最初は自宅と子どもの学校に近いという理由で始めたが、今はほかの仕事は考えられないという。

「薬によって副作用があり、その怖さを知れば知るほど、すごく責任のある仕事をさせてもらっているとつくづく思います。『アドバイスでよくなった』と言ってもらえるのがいちばんうれしい。こちらこそお客様との対話から学び、成長させてもらっています」

夫の宏司さんは14年前、大型トラックによる玉突き事故に巻き込まれて亡くなった。リゾート会社の営業マンで就業中の事故で即死だった（享年35）。安田さんと当時7歳の長男英峻（ひでたか）さん（22）と2歳の長女瑞生（みずき）さん（16）が残された。

スギ薬局富田店に勤務

「長男をスイミングスクールに送って長女と帰宅したら、方々から留守番電話に悲報が入っていて」

安田さんは気が動転し、かけつけた病院では、夫の変わり果てた遺体を目にした。その間のことは、いま思い出しても身震いがするという。本当の悲しみは葬儀を終えてやってきた。

「2人の自分がいました。残された妻としての自分はぼろぼろで。でも、主人のことを思うと、『一番つらいのはあの人だ。家族を残してどう思っているだろう。これからはいろんなことを自分で決めて、生きていかなければ』と、母としての自分が蘇ってきて……」

安田さんの家では、常に話題の中心に亡くなった宏司さんがいる。

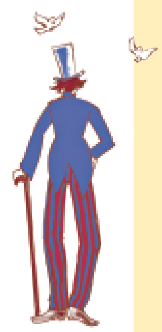
「事故の数時間前に主人が電話をかけてきたんですが、翌日の家族旅行の話題になり、『明日が楽しみやな』と。この言葉は、私たちへの遺言だと思っています。『明日がある』というのはすごくありがたいこと。主人には、すごく生きたかった一日のはずで、一日一日をずっと大事にして生きたいですね」

「お客様の相談を注意深く聞いて対応します」

いま、安田さんは週5日勤務で、休日のうち1日は卓球で汗を流す。高2の瑞生さんは昨年育英会の海外語学研修に参加し、将来、英語を生かせる職業に就きたいと願っている。大学生の英峻さんは今年、卒業した高校で教育実習をし、将来は中・高の社会科教師になることを目指す。

「迷った時は、主人はいま何を望んでいるだろうと考えると、答えも見えてきます。主人に導いてもらいながらの毎日です。ずっと離れずにいてくれてありがとう、という気持ちですね」

あしながおじさんの広場



お便り

新聞のAC広告で知りました

【7月】

同封した図書券などは、前社長の褒章受章の際に記念品として制作したものです。お取り計らいよろしくお願い申し上げます。（北海道M・K社長）

◇

皆さんはご自分の夢に向かって精一杯がんばっていらっしゃることでしょうね。少しですが、お役に立てればうれしいです。（東京都I・Nさん）

◇

スタッフの皆様が元気でいられるよう願っています。わたしも長く応援できるようがんばります。（栃木県A・Kさん）

◇

ラジオのAC広告で知りました。少々ですがお役立てください。（栃木県H・Hさん）

【8月】

今年は猛暑が続いているので、熱中症に気をつけてお過ごしください。（神奈川県K・Rさん）

◇

夏のボーナスも今年が最後となり、退職まで半年余り。一日一日を大切に送りたいと思います。（千葉県K・Yさん）

◇

まだまだ暑い日があるので、皆様お体を大切に。（神奈川県S・Eさん）

◇

少々余裕ができましたので、寄付いたします。子どもたちの将来のためにご活用ください。（広島県T・Kさん）

◇

それぞれの夢に向かって勉学に励んでください。97歳、日々あることに、感謝しております。（神奈川県O・Sさん）

◇

交通遺児の進学支援に役立ててください。（東京都T・Yさん）

◇

私も交通遺児育英会の奨学金を利用し、たくさんの人たちと出会い、世界を広げることができました。今度は私が恩返しをする番だと思います。（東京都I・Tさん）

◇

交通遺児育英会をもっと多くの人に知っていただけるよう、啓発活動をよろしくお願いいたします。（神奈川県M・Aさん）

◇

新聞のAC広告を読み、申し込みました。（神奈川県M・Mさん）

◇

新聞の広告で知りました。（京都府O・Tさん）

【9月】

皆様のご健康をお祈りいたします。（宮城県K・Yさん）

◇

無駄のないよう、有効にお役立てください。（東京都T・Sさん）

ご支援に感謝いたします　育英会から

カーセブンディベロプメント様
名刺一枚一枚に込めた社会貢献

カーセブンディベロプメント様は、自動車流通に携わる企業として、社会的責任を果たすため、全国のスタッフが一丸となって、「名刺一枚につき一円募金」運動を推進され、平成17年より当会に交通遺児支援のため毎年寄付をお寄せになっております。

心塾　豪雨のサマーキャンプ

雨が降り出し、ブルーシートで釜を覆う

心塾東京寮は8月6、7日、山梨県都留市戸沢のせせらぎ荘オートキャンプ場で、1泊2日のサマーキャンプを行った。参加者45人。

心塾を午前9時半に出発し、昼過ぎに青木ヶ原の東口にある鳴沢氷穴を見学した。総延長150メートルの溶岩洞窟には、天井からしみだした水滴が凍ってできた氷柱が並び、気温3度の涼しさを楽しんだ。

せせらぎ荘のキャンプ場には午後3時前に到着した。まずテントを設営し、夕食の準備にとりかかる。1年生はひと足先に温泉へ行った。

すると、とつぜん激しい雨が降り出した。大急ぎで、大炊き釜と飯盒釜を屋根のある場所に移動し、残りの者はずぶぬれのテントを修復。3張りのテントが浸水したものの、残りの6張りは無事だった。

一時は続行が危ぶまれたが、激しい雷雨は1時間ほどであがった。

夕食メニューのカレーと飯盒炊きのご飯は、釜炊き組と炊事係の奮闘により、上首尾にでき上がる。皆、用意した飲料で乾杯し、夕食に。

夕食後は後発組が温泉に行き、その後は皆で懇親会。夜にはバーベキューも行った。

翌日は快晴。朝食後はテント撤収と後片付け。11時、キャンプ場を後にした。

サマーキャンプを始めて13年目、初体験の雨天決行のキャンプだった。

交通遺児育英会の連絡先（平日09:00～17:30）

▽奨学金貸与について	0120-521286
▽返還・猶予・免除について	0120-521287
▽成績相談などについて	0120-521295
▽つどい・語学研修について	0120-521219
▽心塾入寮申し込みについて	0120-355619
▽募金・寄付について	0120-521285